

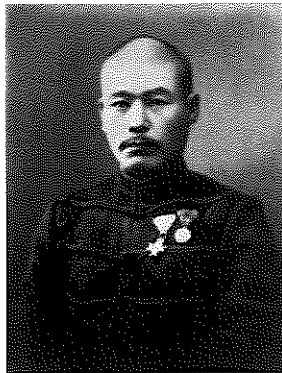
克己心、慈愛、武勇  
橋 周太中佐と「老婆心」

教育問題プロジェクトチーム  
廣瀬 誠 陸自73

1 はじめに

お子さんやお孫さんと一緒に読んでいただき、我が国の道徳についてとも考えていただきたいとの思いから、我が国の軍人を中心に道徳を体現した事例を掲載してきた「先人の足跡」も、早いもので本稿で12回を迎えることとなりました。

昨年7月号の「先人の足跡 ルテナント・コロネル柴五郎」で、柴五郎が活躍した北清事変は、読者の皆様の記憶に新しいと思います。その北清事変での日本軍の活躍、特にその厳正な軍紀は、国際的な評価を得て、英国が栄光ある孤立を捨てて日英同盟を選択する重要な要因となったと言われています。



橋周太中佐 (ウィキペディアより)

その日英同盟は、明治37年(1904年)に勃発した日露戦争で我が国が勝利するための大きな力となりました。日露戦争の勝利により、我が国は名実ともに近代国家の一員となり、明治初頭以来の不平等条約も解消されることになるのです。

今回は、その日露戦争の陸上作戦における重要な局面である遼陽会戦において、壮烈な戦死を遂げ、海軍の広瀬武夫中佐とともに「軍神」とうたわれた橋周太中佐の物語です。橋中佐が、軍神とされたのは、戦場における武勲もさることながら、その平素の言行や人柄が立派であったからです。

2 遼陽会戦直前の橋少佐の統率

遼陽会戦の約3週間前、明治37年8月11日、かねて第一線に出ることを熱望していた橋少佐は、第3師団歩兵第34聯隊第一大隊長を命じられました。

大隊では、それまでに戸山学校に派遣され少佐の薫陶を受けた者もおり、少佐の令名はすでに着任前から高いものでした。着任後から大隊本部書記として、少佐とその最期まで行動を共にしていた内田軍曹によれば、少佐は、大隊全体を一家族のようにしたいという方針の下、酒一本、パン一切れ、豆数粒であつても必ず物があれば各中隊や後方部隊までその恩恵を分つことを

楽しみとしていたといえます。また、医療官に患者表の提出を命じ、常に患者数に注意を払い、自ら病室をまわり患者をいたわり、一日おきに副官を野戦病院に派遣して面白い新聞記事などがあれば入院患者に送つてやるようにしました。

8月中旬、雨が続ききました。戦場ですから、多くの兵卒が雨に濡れそぼつ状態でした。少佐は、雨の中を出て行き、やがて帰つてくると、「海城の兵站司令部で枕木と高梁製の敷物を借りる約束してきたから取りに行くよ」と指示しました。それでも十分ではありませんでした。それでも、深い真心に感激したといえます。少佐は、できるだけ幕舎の兵を屋内に入れることに努力し、民家の軒下をはじめ、大隊本部にも中隊の兵を収容するように指示しました。「自分の部屋で伝令・従卒もともに睡ろう」といわれ、感涙した内田軍曹は、何とか工夫して皆が屋根の下に寝起きできるように努力したのでした。

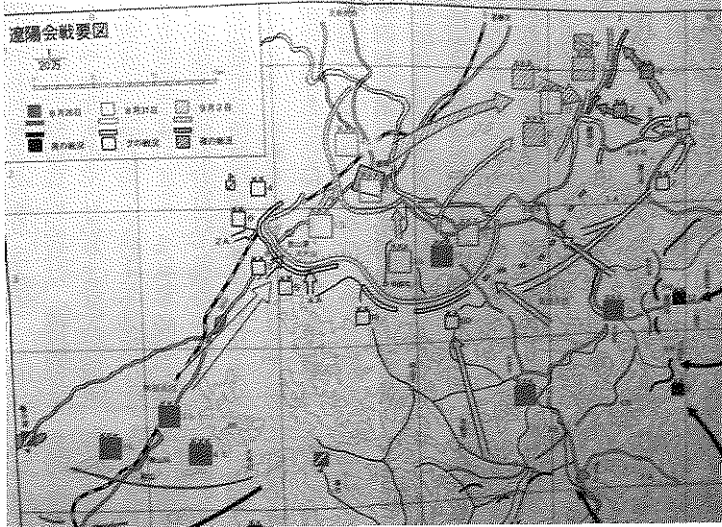
次の文章は、橋大隊長が第2軍司令部付副官である石光真清少佐(陸士旧11期)に宛てた8月20日の手紙の抜粋です(文語体を口語体、現代仮名遣いに改めました)。

「：特にこの雨には部下の困難を見るに忍びません、患者が増えている」とに苦心しており、雨音を耳にするとよく眠ることもできない始末です。(中略)着々改善すべき点を発見して着任当日からいろいろと(改善を)要求している次第です。平時ならば、だんだんに改めればいいのですが、戦時は一瞬を許しませんので、その間違つているところは直ちにこれを改めることが必要なので、私の急進的なやり方はご寛容いただきたいと思えます。今朝は白井兵站司令官を訪問し、いろいろお願いして、防雨材料を貰い受けた次第です(後略)」

この手紙にも、部下に対する愛情とともに、妥協を許さない指導ぶりがかがわれるでしょう。少佐は、巡視する際、部下の間違つていることや、不適切な事は、決して見過ごしませんでしたが、徒に厳罰することはなく、必ず状況を明らかにしてから丁寧に教え諭し、罰も最小限にしました。

このような決戦の前でも、少佐は、朝五時には起床し、洗面・冷水摩擦の後、服装を正して軍人勅諭(注1)を奉読し、馬で前哨や宿营地(注2)を巡視してから朝食をとりました。そのような日々の行動は、一日も変わらなかつたといえます。

少佐のこのような部下に対する慈愛、妥協を許さない任務への姿勢、戦場でも変わらぬ生活態度、そして戦場



【日本の戦争 図解とデータ】 桑田悦・前原透 共編著

における勇氣はどのようにして養われたのでしょうか。それが最もよく分かるのが、橘少佐が、士官学校の卒業生に与えた訓戒の書「老婆心」だと思います。これについてお話ししましょう。

### 3 「老婆心」

「老婆心」は、橘少佐が、名古屋陸軍地方幼年学校長の折、求めに応じて、明治35（1902）年7月に陸軍士官学校を卒業して見習士官となる第14期

生のために書いたものです。これを第一「老婆心」といいます。その後、彼らが、任官するにあたり、改めて書き与えたものが、第二「老婆心」です。前者は、主として見習士官としての心構え、特に中隊長、下士官、兵卒（注3）と対する場合の注意、統率等について行き届いたものであり、後者は、より具体的な初級幹部として勤務・生活・服務の手引書というべきものです。いずれも、橘少佐が、幼年学校入校

以来、研究と研鑽を積んできたことの精華といえるものです。それは、現在の自衛隊の初級幹部の勤務や生活を考へても、極めて貴重なものですが、明治という時代に生きた日本人の生き方を学び、今日の我々を考へるためにも得がたいものだと思います。

それでは、第一「老婆心」について、その内容をご紹介します（原文は、歴史的仮名遣い、カタカナ、文語体です。原文の調子を損ないませんが、現代仮名遣い、ひらがな、

口語体にして記述します）。遼陽会戦直前の橘少佐の統率のよって来たところが了解できることと思います。

#### (1) 部下に対する慈愛

まず、部下等に対する慈愛に関するものを見てみましょう。

#### 兵卒に対する心得

「將たる者は部下を愛する至情を基礎としなければならない。（中略）他日部下を統御するためにはどのようにすればいいのかの研究は実にこの（見習士官の）時期にある事を忘れてはならない。

兵卒の中で好んで普通学を勉強する者がある。また上等兵は諸種の勉強を希望する者がある。もし余暇があるときは夜間等を利用して兵舎に行きこれを教育することもまた必要である。（後略）」

要するに、兵卒に対しては勤務を命ずる場合も學術科を授ける場合もその過失を叱責する場合も皆すべて愛の一字を忘れてはいけない。

#### 統御上に関する心得

「……統御は術であるという人があ

がないので、寒いときに昨日は兵卒に火を与えて今日はこれを忘れるようなことが起きやすい。しかし、真心をもって対している人は、片時も忘れることがないので継続できるのである。

自分が食をほしいと思うときは、すでに兵卒は飢えを覚えている時である。自分が眠気を催す時は兵卒もまた眠りを欲する時である。自分が疲れそうになった時は、兵卒はすでに疲れている時だと考えるべきである。いやしくも兵卒のことを思うことが厚い人であればその時期に一番適している処置をなすことはできないものである」

橘中佐（以下、本「老婆心」の項目中では中佐で記述）は、小隊長時代に、隣接小隊の兵が亡くなり深く同情し、警衛勤務で葬儀に参加できない同僚の兵卒のためにも、翌日、陸軍墓地付近に行進訓練を行い、休止の間に参拝させる等、情に厚い人でした。陸士生徒時代に、中国の兵書にある「士卒未だ坐せざれば食する勿れ。士卒未だ食せざれば食する勿れ。艱難を共にし、勞逸を等しくす」とあることに「感慨止む能わず、乃ち武侯の一言を記して以て自ら警む」としていることは、その後の橘中佐の統率の基本となっていると考えられ、この「老婆心」にも明らかにそれを見て取ることができ、注目されます。

## (2) 公私の峻別と節度

しかし、橘中佐の訓戒は、徒に部下を甘やかすものではありません。同時に教えるべきは厳しく教える態度で一貫しています。また、公私を峻別し、上下少しも慣れ合うことのないように注意しています。公に私を差し挟まないことで、判断を誤らず、良好な人間関係を保ちつつ節度ある適切な指導を行うことができるのです。

### 中隊付士官に対する心得

「……この場合において注意すべきは、その心安さに狎れないことである。いやしくも、狎れることがあれば自然に起居に緩みを生じてその結果、勤務もししくは研究に対する熱意が冷めることになる。どのような場合にも、決して狎れるようなことのないようにしなければならぬ」

### 中隊下士に対する心得

「……下士に過失がある場合、教育しないでその過失を責めるのは少し酷ではなからうか。(中略) 下士に過失があった場合には、これを叱責するにあたり兵卒の面前ですべきか、それを避けるべきかについては注意を要する。その下士の過失が明らかに兵卒の目に映っている場合には兵卒の面前ですべきだが、そうでない場合は努めて面前を避けるのがよい。(中略) 下士に対して至誠を以て対するのは当然で

あるが、親切の度が過ぎて彼らが狎れ近づく等することがないように注意しなければならぬ」

### (3) 国家と軍と自分自身のために躬行率先すること

「慈愛を持ちつつ、教育や任務に対する一貫した厳しい姿勢はどこから来るのでしょうか。それは次に挙げる第一「老婆心」の結びの言葉に表れているように、この国とその軍隊と見習士官となる自分自身のためなのです。」

「……軍隊の発達と自己の発達との為に安逸をぬすみ姑息に陥るより大害はないはずである。皆さんは、身を以て君と国とに致して、他心なく躬行実践事に従うべきである。(後略)」

### (4) 日常の起居を厳守して、克己心を養うこと

さて、この第一「老婆心」の冒頭には、橘中佐は、どのようなことを挙げているのでしょうか。最初と最後に来るものは重要なもののはずです。

### 日常の起居を厳守すること

「克己心を養うことは実に最重要事に属する。その理由は、何事を成し遂げるにもすべてこの心に基因するからである。克己心の多くは日常の起居を厳守することから生まれる。(中略) 予定は必ず実行しなければならぬ。」

この実行を確実にすることができて始めて起居を厳守する人ということができる。そうすれば、自分も自然と心染しくなり、人もまた至誠を感じるようになるはずである。(後略)」

日常の起居を厳守して克己心を養うということが、その最初に来る重要なことなのでしょう。現代の私達には、すぐにはピンときません。

なぜ「老婆心」の巻頭に、起居を通じての克己心を挙げているのか、よく考えてみる必要があります。橘中佐は、乃木大将を大変尊敬していたのですが、その乃木大将のことを、軍人勅諭の「訓諭すべき」項目に沿って、その日記に記していることが参考になると思います。

「最近、我が国将官の数が大いに増加した。そしてこの多数の将官の中で、清正公と比べて、少しも恥じない者は果たして誰だろうか。私は、乃木中将(当時、筆者注)を以てその人であるとすることに躊躇しない。乃木中将の忠誠はその精励によつて知ることができ、中将の礼節はその躬行によつて知ることができ、中将の武勇はその克己と清廉において知ることができ、中将の信義はその言行一致によつて判ることができ、中将の質素はその日常の生活によつて知ることができ」とあります(現代仮名遣い、口語

体に直しました)。

注意すべきは、克己心が武勇の項目で捉えられていることです。そうであれば、克己心が陸軍将校としての出発の「餞」の書である「老婆心」の最初に来るのは、よく理解できます。では、なぜ、克己心が武勇につながるのでしょうか。その答えは、吉田松陰の『武教全書講録』にあります。山鹿素行の『武教全書』巻頭には「武教小学」が置かれています。「武教全書」は我が国兵学を体系化したものであり、「武教小学」は、武士のための訓戒です。

吉田松陰の『武教全書講録』は、「武教小学」に関する講義がその主体となつています。

その最初の項目である「夙起夜寐」には、浩然の気を養うことの重要性が説かれており、また、「行住坐臥」の項目には、次のように書かれています(口語訳は、川口雅昭全訳注「吉田松陰 武教全書講録」によりました)。「この篇は『敬』という一字をそのまま表現したものである。(中略)『敬』とはつまり備えのことである。武道ではこれを覚悟という。(中略)敬・備は怠の反対であり、「怠」とは乃ち油断である。武士たる者は行く、止まる、座る、臥す等日常の起居動作全てに覚悟をもち油断ないようにするべきである」とのことである」

「そもそも、『敬・備・覚悟』というものは、ただ一人の武士の身を守る為だけのものではない。昔の立派な君主や賢明な武將はこれによってその身を

守り、また、その近臣や大臣を教え諭し、更にはその国民をも戒めた。(中略)

現在、天下の人々はこぞつて平和に安んじ、人の予期しないところを襲撃する気持ちなどないように思われる。しかし、変事とはいふまでもなく平常

のことではないので、『変事の勃発は予測することができない』という教えを、どうしておろそかにしてよからうか、おろそかにしてはならないのである

日常の起居を律することは、浩然の気を養い油断なく備える心と覚悟を養うことだといふのです。これで日常の起居を通じる克己心が武勇という武人の徳目につながる事がわかります。橋中佐が第一「老婆心」の冒頭にこれを掲げたことには、そのような大切な意義があると思います。

#### 4 橋中佐の最期について

8月31日、少佐は首山堡の戦闘で壮烈な戦死を遂げます。その状況は、筆者が拙い文章を試みるよりも、上下三十一連の叙事的な軍歌「橋中佐」(偕行社刊「防人の歌 雄叫」所収)を読んでいただくのが一番と思います。

橋大隊長の武勲、忠節、慈愛、部下が大隊長を慕う姿が描かれており、心を動かされます。

8月11日の着任から3週間足らずの大隊長としての期間における叙上のよきな橋少佐の姿は、少佐が幼年学校入校以来追い求めて研鑽を積んできた理想とする軍人の姿そのものであったといふことに、若い皆さんも感慨を覚えるのではないでしょう。

#### 5 橋中佐の年譜

おわりに、橋周太中佐の年譜を記しておきます。

慶応元年(1865年)、橋季憐(すえやす)の次男として長崎県の千々石村に生まれる

明治17年(1884年)、陸軍士官学校に進む

明治20年(1887年)、歩兵少尉に任官、青森の歩兵第5聯隊付

明治22年(1889年)、近衛歩兵第4聯隊付

明治24年(1891年)、東宮武官

明治28年(1895年)、大尉に進級、近衛歩兵第4聯隊中隊長

明治30年(1897年)、戸山学校教官兼教導大隊中隊長

明治35年(1902年)、少佐に進級、名古屋陸軍地方幼年学校長

明治37年(1904年)、日露戦争

開戦、橋少佐は、第2軍管理部長として出征  
同年、8月11日、第3師団歩兵第34聯隊第1大隊長

同月31日、遼陽会戦、首山堡の戦闘で戦死 陸軍歩兵中佐

若い読者のための参考として注を付記します。

注1 「陸海軍人二賜ハリタル勅諭」は、日本最初の兵士の反乱となった明治11年(1878年)年の竹橋騒動等に鑑み、根本的な軍人道德を確立するため、その抛り所として明治15年(1882年)、発布されました。教育勅語が漢文調なのに比し、全体が和文調で書かれています。訓諭すべきとされた項目五箇条は次の通りです。

一、軍人は忠節を盡すを本分とすべし

一、軍人は礼儀を正しくすべし

一、軍人は武勇を尚ぶべし

一、軍人は信義を重んずべし

一、軍人は質素を旨とすべし

注2 宿营地は、戦闘に入る前等に、準備のために部隊が集結する場所である。前哨は、宿营地等を警戒するため

の警戒陣地です。

注3 中隊は、百名から2百名程の組織であり、中隊長以下、将校、下士、兵卒からなっています。下士は、兵卒

から選抜され将校と同様、職業軍人である

あり、分隊長、内務班長などとして兵卒を指揮・監督します。

#### 【参考文献】

・「中佐の日記と「老婆心」付 橋周太小伝」岡村誠之著

・「経験余録十附録老婆心」陸軍歩兵少佐橋周太氏著 東京軍事教育会蔵版

・「吉田松陰 武教全書講録」川口雅昭 全訳注

・「石光真清の手記」石光真人編

・「近代戦争史概説 上巻」陸戦学芸

・「日本の戦争 図解とデータ」桑田悦、前原透 共編著

・「新世界史」前川貞次郎、堀越孝一 共編著

・「防人の歌 雄叫」偕行社

#### 広告目次

(株) セレモア	表紙3
(株) 東京都民互助会	表紙3
ローレルバンクマシ(株)	表紙4
須藤 石材 (株)	39
(株) 武蔵 富装	51
信和株式会社	51
(株) 和泉家石材店	52

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。